

タイトル：高校生の交換留学・ホームステイ ～その現状と課題～

講師：財団法人 AFS 日本協会 新潟県代表 小池 泰子氏

### 高校生の交換留学とは

私は、AFS 日本協会のボランティアとして 30 年近く、主に留学生受け入れに携わってきました。きっかけは、過去に自分自身が AFS プログラムでアメリカへ行き、お世話になった恩返しとして、次の世代に同じ体験をしてもらいたいと思ったことです。

本日お話をするのは、旅行業・ホテル業などの仕事とは直接結びつくものではないかもしれませんが、皆様も「観光産業」という点では、外国との関係は切っても切れません。日本と外国とのつながりをどう作っていくか、という点で共通点があるのではないかと考えています。

ところで、高校生の「交換留学」という言葉は、実はあまり正しく理解されていないようです。深く考えたことがない方が多いかと思いますが、「私費留学」と「交換留学」は異なるものです。交換留学というと、大多数の方には、お互いに生徒同士を交換するものと理解されていると思います。しかし、「交換」留学とは、“CULTURAL EXCHANGE”の適切な訳語がなく、「文化交換」と訳されたことから来ています。すなわち、文化をお互いに交換する目的の、10代の青少年を対象にした異文化体験プログラムということです。

派遣先の国で高校に通学しますが、私費留学は単位取得が目的です。しかし交換留学では、私費留学のように自ら行きたい高校を選んで試験を受け入学するのではなく、受け入れ校に聴講生のような形で入り、文化交流をします。また、期間も原則「一学年間」(one school year)にわたります。生徒はボランティアの受け入れ家庭に滞在し、その地域の高校に授業料免除で通学します。この2点が重要な要素となっています。

### なぜ高校生か

また、家庭生活になじめる年代かどうかも重要です。AFS は 60 年前、第二次世界大戦後すぐに活動をスタートさせた際、はじめは大学生を対象としていました。ホームステイで家庭を体験してもらい、家族という関係を作ることによって相互理解を推進したいという目的ですが、ところが大学生は既に自己が確立してしまい、家庭になじみにくいという現象が起きました。「お父さん、お母さん」とは呼んでも、あまり頼らなくていいがために家庭の方針にもなかなかなじめなかったのです。そこでもっと若く柔軟な年代を対象にすべきとなりましたが、とはいっても若ければ若いほどいいということではありません。小・中学生は順応は早いものの、自分の文化を意識せずに相手の文化を受け入れるために客観的比較が難しく、自分を忘れて相手に染まってしまう。その点高校生は柔軟性もあり、自国の文化と比較するだけの成熟度を持っている年代ですから、もっとも文化交流・異文化体験に適した時期だということで、以来ずっと高校生の交流を続けています。

### ホストファミリーとホストスクール

私費留学では行きたい高校を生徒が選んで応募しますが、交換留学ではホストファミリ

ーやスクールは自分で選ぶのではなく、交流実施団体がマッチングすることになっています。

私費留学は授業料を払い、契約によって教育サービスを受けます。従って学校は生徒に学力をつけ、単位を取らせなければなりません。それにはある程度の語学力がないと難しいですし、語学力がなければ留年してでも単位をもらわなくてはなりません。一方、交換留学の場合は、その国の言語ができなくても、その期間を通じて学び、その国の人々と交流して文化を吸収していくことが目的です。私費留学の場合は留学生が主役ですが、交換留学の場合は留学生と同時にホストファミリー・受け入れ高校 広く言えば地域社会の人々すべてが文化交流の参加者という概念になります。

#### 交換留学が成り立つ仕組み

交換留学が成り立つためには、生徒自身の努力やホストファミリーのご苦労だけでなく、その陰にプログラムを成り立たせるための諸制度やさまざまな人々の営みがあります。

日本から海外に行く生徒たちは、英語圏であっても日常的に意思疎通ができる語学レベルには残念ながら達していません。世界に比べるとかなり英語力が低いのが現実です。実は保護者や学校の先生の引率もなく、言葉もできない子どもが一人で外国へ行って生きていけるほど世の中は甘くありません。ですがほとんど多くの高校生が、非常に親切な人々に恵まれて有意義な体験をしてきています。しかし、それは偶然ではありません。というのも、「親切な人に出会うとこにしか送らない」というシステムになっているからです。

交換留学は必ず交流実施団体が間に入っており、アレンジを行っています。その役割は、交流のネットワークを作り、維持することです。責任を持ってくれる組織なりボランティアがいて、信頼できるサポートがあるところにしか生徒を派遣しません。AFSのように各国にAFS組織があり、互いのネットワークの中で生徒を交換する国際的な組織もある一方、日本の組織が受け入れ国のホームステイ受け入れ団体と提携して行う場合もあります。いずれにせよ信頼できる相手のあるところにしか生徒を派遣しません。

また、プログラムの質を管理するために、参加規程や実施基準があります。生徒にルールを明確にしておくのが参加規程です。行って勝手なことをされたり、ホストファミリーのペースに合わせなかったり、ホストファミリーを勝手に変えたり・・・などということがあると、責任を持てません。ホストファミリー側も、ある程度家庭生活に入れる資質を持った生徒でなければ困ります。その点から生徒も選考しますし、規程として明確にしておきます。

その上で、現地組織と共同し「プログラム実施基準」を定め、最低限保障するものを明確にしておきます。ほとんどがボランティアの団体のため善意による奉仕活動ですが、それだけでは責任を持ちきれないため、どの国の事務所も有給の職員をおいています。生徒に直接対応するのは無償のボランティアですが、だからといっていい加減では困るからです。無償の善意の行為ではあるけれど、最低限やるべきことを決めておきます。

受け入れ学校も、それぞれの国の学校教育法上、正規の高校にあたる場所を選定しま

す。これも約束しておかないと、たまたま受け入れ学校がなかったために公民館の語学学校へ通う、となると質が確保できません。こういった意味で、実施基準を決めホストしあうということになっています。

交流実施団体は留学生やホストファミリー・地域の協力者など参加者全員の異文化体験を実現する立場ですから、単なる仲介・斡旋という立場とは異なり、このように「質の管理」という重要な役割を負っているわけです。

#### 交流の仕組み

AFS を例にとって交流の仕組みを説明します。AFS は、世界約 50 カ国の加盟国に組織があり、交流を行っています。AFS 組織がないところとプログラムを実施する場合は、相手国の外務省や教育省と連携しています。また、国際本部という機関では、各国が集まり、プログラムの基準や運営方をコーディネートし、プログラムの質を維持するために重要な役割を果たしています。時代や状況の変化により実施基準も変えなければなりませんし、場合によっては生徒の保護の観点から基準を厳しくするなど、常に国際本部で話し合い実施基準を決めています。

国際本部のもう一つの役割は、災害や政情不安のような大きな危機への対応です。例えば、災害時の生徒の安否確認です。通信網や電気が途絶えて連絡できない場合には、近隣諸国の AFS や国際本部が動くこともあります。メキシコの新型インフルエンザ発生が直近の例でしたが、その時は国際本部の判断でメキシコから生徒を帰国させました。また、経済的に安定している国もそうでないところもあり、ボランティアの組織の強い国、弱い国もあります。そういった場合は事務所を強化したり、寄付が集まらない場合は国際本部が財政援助して体制を維持しています。

#### サポート体制

生徒たちを実際にどうサポートしていくかですが、AFS では、異文化体験には時間が必要だという観点で「一学年間」のプログラムを基本としています。わが子が一年外国に行くわけですから、送り出す側はもちろん不安に感じられると思います。よくある日本の学校で企画しているプログラムは学内での募集で、よく知った先生が引率し生徒の世話をし安全を保つものです。いつもの先生、それに友人がそばにいるわけですから、何かあっても安心です。しかし、一方で本当の意味で現地の文化と触れているかという疑問が残ります。困ったときに現地の人々とコミュニケーションをとる必要がないからです。今まで一緒に生活してきた先生や仲間がいれば日本語ですればいいのです。現地の人とは、通じなくてもたいした問題でないことしか話さないことになるでしょう。そうではなく、自分の文化から離れ、相手の考え方との違いに触れるためになるべく一人にするようにしています。しかし、そのような環境を保証しながら安全を保つのは結構難しいことです。

生徒の保護者とホストファミリーは文化も言語も違うため連絡を取り合うことは困難です。ですから各国の事務所間では共通語の英語で連絡を取り合う体制となっています。A 国から B 国へ留学する場合、A 国の地域事務所・支部が責任を持って生徒を選考します。選

考基準には成績・健康状態・問題行動の有無などがあり、B国の事務局は、A国の地域事務所が出発までしっかりオリエンテーションすることまでを信頼し受け入れます。また、B国の事務局は地域事務局・支部を通して各地域に生徒を配属しますが、地域がホストファミリーを募集し、ホストスクールを開拓します。ホストファミリー・留学生・スクールをつなぐ担当相談員も必ず配置します。ボランティアですが、留学生と必ず日常的に連絡をとれる状態にしています。学校・家庭への適応状況・人間関係・問題行動の有無を常にモニターしているわけです。それをレポートしていくことによって事務局が生徒の状況を把握でき、保護者からの問い合わせに常に答えられるようになっているわけです。

ホストファミリーも、受け入れに手を挙げてくれるからといって適しているかどうかはわかりません。ファミリーの選考も国際基準で決められていて、ボランティアスタッフが必ず一軒一軒伺い、ファミリーインタビューをしてから決めます。基本的に家族全員に会い、家族全員が受け入れに賛同し、自分の目で見てふさわしいかどうか（経済的に豊かかどうかはあまり問題ありません）を見ます。

逆に、生徒を選考する側でも、生徒だけでなく保護者にもインタビューをします。よほどのことがない限りダメということはありませんが、きちっとした家庭生活を送れる生徒かどうかを面接（家庭訪問）で見るとのことです。

担当相談員はというと、問題がなさそうだからといって生徒を放っておいていいわけではありません。国によっては国レベルで基準を持っています。例えばアメリカは何万人と受け入れを行っており、非常に厳しい基準を持っています。まず、営利団体はプログラムを実施してはいけないことになっていますし、生徒のモニターも、最低月1回電話で声を聞くか、会って話すかをしなければなりません（メールは不可）。その対応への監査もあり、クリアしないと交換留学のためのビザを申請できる団体の認可を取り消されてしまいます。携わる人の多くは無償ボランティアではあるものの、こうしてきちんと体制を整えてはじめて、高校生にとって安全で教育的意義のある交流が成り立っているのです。

#### 高校留学生数の推移

ところで、文部科学省では二年に一回「高等学校における国際交流の状況について」という調査をしています。この表（図1）は日本から海外へ3ヶ月以上（文科省では3ヶ月以上は留学、以下は研修旅行）行っていた生徒数のグラフですが、私費留学も含まれています。お分かりのように、2006年～2008年の二年間で18.5パーセントの減少です。高校生人口が減少していることを割り引いても、海外留学する生徒数が減っているのがわかります。

このデータで特徴的なのは、派遣先がアメリカ・ニュージーランド・カナダ・オーストラリアと、英語圏で82.5%を占めることです。その他はわずか17.5%ですから、日本から海外への留学はほぼ英語圏に偏っていると言えます。

一方で、受入数も減少しています（図2）。同時期で2.7%の減少です。派遣に比べると率は低いのですが、派遣は3000人以上いるため算出の根拠数が違います。もともと日本は

派遣超過です。ちなみに、日本への受け入れは中国からが 27.7%と最大です。しかしこれは交換留学ではなく、私費留学や、親御さんと一緒に来日し日本の高校に通っているケースなどが考えられますから、交換留学は依然として少ないと思われます。

次に AFS の年間派遣生の数 (図 3) です。AFS でこれだけ減っていますが、残念ながら交換留学の派遣をやめた他団体もあるので、この表に見られる以上に高校留学の希望者は減っているでしょう。もう一つ気になるのは、アジア圏へ行く生徒が少ないということです。先ほどお話したとおり英語圏に大きく偏っているのです。ヨーロッパは増えているのですがアジアはかなり減っています。実は 100%の奨学金がついたプログラムでも枠が埋まらないこともあります。学校教育では英語ができることが将来的に有利なので、英語圏を選ぶ傾向は理解できなくはありませんが、日本全体の人材育成という観点では大きな問題だと感じています。日本にとってアジアの近隣諸国は非常に大切なパートナーです。近隣諸国と友好な関係を築けないのは、将来に非常に大きな問題を残すのでは、と心配せざるをえません。

日本の高校生の特徴として、「アジア人としての自覚がない」ということがあります。例えばアメリカに行き、何十カ国の生徒が集まるオリエンテーションやイベントでは、自分たちがアジア人という自覚がなく、はじめは欧米を向いているのだそうです。しかし、結局その一年を通して、アジアの人のほうが一緒にいてなぜか落ち着く、という感覚になるそうです。英語のレベルもそうですが、文化的に似たものがあるということに気づき、アジア人としての自覚が出てくるというのが、非常に大きな特徴であり意味あることだと思っています。

その自覚が出来てはじめて、アジア各国が文化的に対等だという気持ちになり、欧米に対するどことなく劣等感も乗り越えられのではないかと思います。日本人はアジア諸国を低く見ている見方もないとはいえないと思います。そういった感覚の克服のためにも、多国間交流は大きな意味がありますし、アジアに若い人たちをもっと多く送り出したいと考えています。

一方海外から日本への生徒数 (図 4) ですが、少しずつ増えてきてはいるものの、海外からは受け入れをもっと増やしてほしいと言われいています。しかし受け入れ家庭の確保がそれに追いつかない状況です。ちなみに、受け入れの多くはアジアからですが、これは奨学金のおかげです。参加費を支払ってもらわないと運営ができませんが、アジアの国の一般家庭の生徒たちはまだ経済的レベルが厳しく、奨学金でカバーしています。一言でいうと奨学金の開発を行って数が増えてきたのです。奨学金にはそれこそ十倍という生徒が応募し、それを勝ち取った生徒がやっています。こうした生徒は貴重な、日本にとって将来の宝です。ただ奨学金がなくなれば受け入れが途切れてしまうという現状でもあります。

AFS インターナショナルの傾向では、どちらかという先進国は受け入れの多い国 (人気国) ですが、経済的に安定していない国は受け入れ数を増やせないため派遣超過になっ

ています。AFS 日本協会も、年間プログラムだけを見ると派遣超過ですが、短期を含めると受け入れの数のほうが多くなり、バランスは取れてきています。一時期は 400 人派遣して受け入れが 100 人以下の時代もありました。私はこのプログラムにかかわってずいぶん経ちますが、非常に大きく変わったと実感しています。そういう意味では日本も先進国型に近づいてきています。

#### 深刻なホストファミリー不足

しかし、日本がようやく注目を集め、来日を希望する生徒が増えてきていても、受け入れ家庭が足りないために断らなくてはならない状況です。昔は、日本が第一希望ではないけれど、希望国の枠が足りずにやむなく日本に来たという例が多くありました。そういった意味では、日本を希望する生徒が増えているということ自体がたいへん有難いことです。だからこそ、なおさら要望に応えなければならないと感じています。

日本へ興味を持つ生徒は、20 数年前からは徐々に変わってきています。その頃は日本語を勉強してから来日する生徒はほとんどありませんでした。日本語教育が今ほど普及しておらず、学ぶ機会に恵まれなかったからです。一方今では、海外の学校で習う生徒が増えました。そういう生徒たちは、せっかく習った日本語にもっと磨きをかけたいと日本を希望してきます。それから 日本の受け入れ先とも多少ミスマッチを起こすことにもなりますが マンガやコスプレといったポップカルチャーにあこがれて希望してくる生徒たち（特にヨーロッパ）も多くなっています。20 数年前には、黒澤明の映画を見て日本に興味を持ったという生徒がかなりいましたが、今はマンガや秋葉原。とはいえ、いずれにせよ日本に来たいという生徒が増えていることは非常に有難いと思っています。

AFS 日本協会に確かめたところ、タイ・マレーシア・フランス・スイス・アイスランド・ベルギー・デンマーク・フィンランド・ホンジュラスからの受け入れはこれ以上増やせないということでお断りせざるを得なかったそうです。AFS 日本協会内部もホストファミリーが増えない理由をいろいろ考え対策を練ったり、また広報活動の一環として、新聞の協力を得てホストファミリーを増やす取り組みなども行っています。

#### ホストファミリーの満足と不満

その上で、ホストファミリーが増えるためには、「満足した」と感じる経験者がもっと増えなければならないと考え、そこでファミリーの満足度に注目してみました。

AFS 国際本部のアンケートデータを見てみると、日本のホストファミリーは世界の平均に比べ比較的満足度が低いのです。全世界の AFS は 10 万人くらいの生徒を交換していますが、特に日本に来る生徒が問題を起こしているわけではありません。どうやら日本のホストファミリーのほうに満足できない要素があるのでは、と考えてみました。

まずは経済的負担です。日本は生活費の高い国です。ヨーロッパや他諸国でも消費税が 20% レベルの国もありますが、日本の生活費が高く経済的負担が大きいというのも大きな原因の一つかもしれません。

また、現代の家庭生活が大きな影響を与えていることも考えられます。高校生の生活実

態を見てみますと、ほとんど家にいないのです。日本の高校生の多くは、学校か塾にいるかです。留学生を受け入れても自分の子供が時間がなくて交流ができない、と考えられている面もあると思います。さらに核家族で共働きの家庭が多くなりました。となると、留学生は学校から帰ってきても留守番するだけになってしまいます。加えて、核家族は内向きなのでさまざまな人が出入りしないことが多く、人間関係が固定化していて他人を受け入れにくい、というのが最近の傾向かと考えています。また、仕事以外のことに時間を費やすことが好まれていないという日本人の働き方も原因のひとつだと思います。

文化的背景にもいくつか考えられることがあります。核家族のところでも述べましたが、人間関係が固定化され、さまざまな人が出入りする習慣がなくなっているという現状があります。私が子どもの頃は親戚同士お互いの家に泊まりあうのは普通でしたが、今はそれほど多くないようです。その上、ウチとソトをしっかりと分けるのが日本文化の一つの特徴です。だからお客様には徹底的におもてなしするが、一方でなかなか開けっぴろげにできません。そこがホストファミリーが疲れてしまう原因の一つではないかと思っています。

ところで、ウチとソトをわける代表的な例は、日本人が玄関で靴を脱ぐことですが、ここでよく起こる文化摩擦があります。留学生は靴を脱いで家に入ることはもちろん知っていますが、靴を脱いで一度タタキに立ってから家に入ったり、逆にタタキに降りてから靴を履いたりすることがあるのです。確かに靴は脱いでいますが、日本人からするとウチとソトとを分けているとは感じられません。この感覚が理解できないために摩擦が起こり、イライラする、という例もあります。

それから、期待が高いことも挙げられます。自分はこれだけおもてなしをしたので、相手にもこたえてほしいという感覚を日本人は持ちやすい。それは日本人のいいところでもあり、マイナス面 表裏一体 でもあると思います。

また、察することを期待する文化なので、ストレートに相手に気持ちを伝えることが苦手です。言ってしまうばいいのに言えないのでストレスがたまります。これも留学生とホストの間によく軋轢が起こります。例えば、留学生が「お母さん、これをやっていいですか？」と聞くと、お母さんは、本当は嫌なのに、ノーということにストレスを感じるため「自分で判断しなさい」と答えてしまい、結果留学生はその通りにやってしまうことがあります。お母さんとしては「どうして私が思っているようにしてくれないの？」と感じてストレスになってしまうのです。

また、日本人はまじめすぎるという点もあるでしょう。赤信号のとき車が通っていなくても日本人は待っています。決められたことはきっちり忠実に守ります。留学生は、規則は理解したが、大した問題にならなければ崩してもいいだろうと思うほうが普通です。それに対して日本人はルールを崩しただけで「道徳的におかしい」という発想なので、軋轢が起こってしまいがちなのです。

それに、日本では、目上の人に指示されたとおりにやるのが最良だと考える文化もあり、

ここでも行き違いが生じます。日本人の素直さ 言われた通りにすることが評価される文化なので、日本のファミリーにしてみれば、留学生に何かを言った時「なんで？」と聞かれると、どうして素直に言うことが聞けず口答えをするのかと直感的に感じてしまうことがよくあります。これは説明しようとしても難しいので、こじつけでもいいので何か理由を言ってあげてほしい、とホストファミリーにはお伝えしています。

逆に、日本から外国に行った生徒で、指示されたとおりのやり方をせずにホストマザーに注意され、すぐに謝ったところかえって激怒され「なぜいつも謝るのか。あなたなりの考えがあってやったのなら説明してくれないとわからない」と言われた子もいました。異文化目線とは恐ろしいもので、理屈としてはわかって、その場で即感情的になってしまうようなことはよくあるのではないかと思います。

日本のファミリーはそういう現象を真面目にとらえすぎるくらいがあり、満足度に響いてきてしまうのかなとも思います。日本人には異文化摩擦の経験が多くありません。街に出ていろんな人、いろんな国・いろんな習慣の人が共生していれば「違って当たり前」という感覚が自然と身につきますが、そうってはいないからです。

一方で、日本人は「郷に入れば郷に従え」がとても得意です。素直に従うことを美德と習慣づけられている人々の集まりだと思います。ですが、そのせいで無意識のうちに相手に同化を求めてしまうので、相手に文化的抑圧を与えてしまいます。相手のカルチャーショックを理解できない状況にあるのでしょうか。つい最近聞いた話ですが、日本に来たある留学生が、「登校した初日に全校生徒の前で壇上で紹介された時、目の前に全員同じ制服を着た生徒が1000人くらい、揃って起立！礼！をした」ことが大変ショックだったそうです。それは留学生にとって恐ろしいくらいのことだったのですが、私たちはそれを想像だにしていませんでした。こんなところでも、外国人の立場にたって心情を理解できないことがお互いのストレスになってしまうのではとも思います。

#### ホストファミリーの楽しみと喜び

今度は逆に、楽しみは何かという点についてお話しします。

一度受け入れを経験して、その後何度もホストファミリーを受けるご家庭があります。そういうご家族は、一言で言えばまじめ過ぎない、いい意味で「いいかげん」な ユーモアのある 方々です。異文化体験にはユーモアが必要だと思います。また、異文化に強い興味があり、自分のところに来た生徒だけでなく別の生徒とも積極的に交流するファミリーは、文化の違いを感じることを楽しみにしています。ものの見方が変わるということは楽しいこと、喜びにつながることはないかと思えます。それを感じられるようになった方は楽しんでホストになってくれています。

若者の成長に触れる喜びを感じるファミリーも、何度も受け入れに協力してくださいませ。生徒は来たときは日本語も話せないし、習慣もわからない。どこにも一人で行けないし、手がかかる存在です。それが、滞在している間に言葉はうまくなり、周囲のようすがわかり、一人で出かけてくる 彼らが大きく成長し、ものの見方が変わってゆく そう



いう点で、生徒の成長はホストファミリーにとって大きな喜びになると思います。

外国人と暮らして摩擦を体験し自分を知ること、当たり前だったことが当たり前でなくなり、見えていなかったものが見えてくるのは大きな喜びです。細かいことはたくさんありますが、何年やっても新しい発見はあるものです。時々、日本語で苦労している生徒にボランティアが日本語指導に行くことがあります。あるボランティアから「担当の生徒は全然やる気がない。レッスンに来るのに辞書も持ってこない。自分で調べる気がないんだ」とクレームがありました。一方、ある時ブラジルに行った生徒が帰国した後にこのように言っていました。「ずっと辞書を持ち歩いて授業中に引いていたら、先生から『なぜ辞書を引いてるの。教師がいたら聞きなさい。言葉というのはそうやって覚えるものだから、今後辞書を持ってこないように』と言われた。」と。国によってまったく違いますね。辞書を持ってこないからやる気がないわけではないのです。こんなことも新しい発見でした。

このように、ものの見方が変わることは、生き方の幅を広げてくれるのではないかと考えています。何年やっても、こういう喜びに出会います。またその中で寛大さを学びます。同じでなくても暮らせないわけではありません。割り切りかたが上手になります。それも成長の一つだと考えています。

そして、何より大きな喜びは、外国に子どもが出来るということです。一年間お付き合いしたゆえに、彼らは今後ずっと成長を楽しみにできる存在です。逆に言えば、一年しか育ててないのに、一生その子の成長を楽しみにして、見せてもらうことができるのです。成長した彼らが里帰りしてきてくれたり、子どもを連れてきてくれたり。ホストが逆に生徒の国を訪問したりと、そんな交流が続くのは、わたしたちにとっても非常に嬉しいことです。

あるホストのお母さんは、受け入れた女の子が「お母さんの料理は油を使いすぎて健康によくない」と言われ、心外で腹を立ててしまったのですが、生徒が帰国してからその国を訪ねて、彼女の家の家庭料理を食べてみて、彼女の言うことがもっともだったと理解できたそうです。理解は一挙には進みません。こういったホスト体験の喜びというのをできるだけ多くの方に知っていただきたい、と思っています。

今後の交流促進のために

皆様に、異文化理解を育むというパンフレットをお配りしたと思います。その中に「異文化理解度」という図（図5）があります、異文化理解には一般的な発達モデルがあります。まず最初は Denial 異文化を認めません。これは江戸時代くらいの日本にたとえてもいいでしょう。次に Defense 違いを恐れ自己防衛する段階です。新しい文化が入ってくると、恐ろしくて近寄れない。黒船が来た段階です。次は Reversal 自分の文化を蔑視します。なんでも舶来がいい、外国のものがいいという段階です。それから違いを最小化する Minimization という段階になります。ここは、違いがあることを知って楽しむけれども、違うことを過小評価し「みんな同じじゃないか」と簡単に理解したと考えてしまう

段階です。飛び越えすぎてしまうんですね。一般的な日本人はいまこのあたりにいるのではないのでしょうか。本当に違いを認識し、受け入れて適応していくのがこれからの段階なんだと思っています。

AFSとは“AMERICAN FIELD SERVICE”「アメリカ野戦奉仕団」の略称です。もともとは第一次大戦の戦場で傷病兵を救急車で運ぶボランティアでした。第二次世界大戦。戦場で傷ついた人を助けるより、戦争をおこさないための人物交流を行おうと活動を転換しました。そして60年、いろんな問題やトラブルもありました。ハロウィンで誤って銃撃され亡くなった服部君の事件をご記憶の方も多いでしょう。しかし、悲惨な戦場を見た人たちがこの活動を続けようと思った気持ちがどんなに強かったかを考えると、さまざまなトラブルを乗り越えてもやり続けなければ、と思います。

ホームステイには本当に大きな力があります。こんな話があります。アメリカの元国務長官のキッシンジャー氏のお嬢さんは日本にホームステイしていました。一方キッシンジャー氏本人は仕事で何十回と日本を訪れ、何百人何千人もの日本人と会いましたが、娘の日本留学を通してほど日本のことを理解できたことがないと言っていたそうです。保護者も含めていい異文化体験になっているということです。ここにお集まりの皆様にもぜひご理解をいただいて、活動にご賛同・ご参加いただきたいと思っています。